

くすりの周辺 (91・12・12)

茅壁 敬祐 (昭15・理乙)

茅壁でございます。先月の十二日会、家族会には、板倉さんがご欠席になったものですから、世話役の中村典美君から、「来月の講師は俺が決めないといけないので、お前やれ」ということでございます。その時、彼より下は私しかいなかったもんですから、止むなくお引き受け致しまして、ピンチランナーを務めさせて頂きます。

彼が出した演題の「薬業の諸問題」なんて大きなことは申し上げる立場でもございません。この十二日会には、喜田村健三さんの様に、まだ現役の方もいらっしゃいます。それから、木村さんや津田さんなど、以前にこの業界にご関係なさって裏も表もご存知の方が、いらっしゃるわけですから、あまりうっかりしたことは云えないと思っております。只、私は大学で薬学を修めたものですから、この経歴は、十二日会に他にいらっしやらないと思いますので、その辺を手がかりにしてお話をさせていたゞきます。従って、題を「くすりの周辺」ということにさせて頂きま

す。

申し遅れましたが、私は昭和十一年に三高に入りまして、理乙だったですから、今日は来ていませんが、いつも来ている植村健君と同じクラスでございます。従って本来ならば、昭和十四年に卒業するはずでしたが、途中で病気を致しまして一年休学したものですから、昭和十五年に卒業致しました。当時、健康に自信がございましたので、どこか一番、楽なところへ行きたいということで、大学は薬学を学びました。別に我が家が薬に関係があったわけでもなし、私が、薬にそれ程の使命感をいだいたわけでもございません。何となく薬学に入りまして、戦後は何となく製薬会社に勤めて、生涯の大半を終わったというところでございます。

そういう、あまり関心の無かった薬学でございましたが、今になってみますと、案外薬学というのは、三高と縁があるんじゃないかなという様に感じております。で、その辺りから、お話に入らせて頂きました。日本の薬学は、三高と大変縁があるんだということを申し上げます。それに、日本の薬学では、なぜ、これといった薬が出なかつたかという言い訳をさせて頂きます。もっとも「最近」ということになりまして、方々からどなられそうですので、「戦前の日本の薬学では」ということに限定させて頂きますが、日本の薬学では、これといった薬は出なかつた。三番目に、そんなこと云ったって、一つの薬を市場に出すのは、とても大変なことなんだということをご説明さしていたゞき、最後に、薬に関します言葉を、いくつか、ご披露致しまして、お

話を終らしていたゞきたいと思ひます。

三高と薬学との関係でございますが、申し上げるまでもなく明治二年の五月一日に、舎密局が開講されました、その時の会頭のハラタマですが、彼は舎密局では、いわゆる純粹化学を教えておりましたが、本来、お医者さんだったわけです。オランダの軍医学校を卒業致しまして、医学博士の学位を取りましたが、その論文が「疥癬に関する調査」、疥癬というのは、瘡蓋が出来ます。大変痒い皮膚病でございますけれど、本人は硫黄化合物で特效薬を創ったんだということを云っているそうです。

実は、ハラタマは国へ帰りまして、一八八八年の一月に亡くなっておりますが、三年程前に、その没後百年祭というのが、大阪で行われまして、その記念講演会で、話をした一人に、椎原庸君がおります。彼は昭和十四年の理甲の出身で、この会にも東京に居た時には、よく来ておりました。彼から教わったことなんですけれど、そういう訳で、ハラタマは、先ず、薬をやっていた人なんだということが一つ、それから、これも椎原君が云っていたことなんですけれども、明治の初めに、いや、明治時代にと云った方が良いかも知れませんが、日本で、いわゆる薬学を引っぱっていた人というのが、二人居ります。一人は長井長義、もう一人は高峰讓吉です。長井という人は、阿波徳島藩の出身でして、永くドイツへ留学致しました。帰って来て、東京大学の薬学科の主任教授になりました。日本薬学会を創って、その会頭になり、日本薬剤師会の会長を務め

ました。最後は、日本女子大学の学長になった人ですけれども、この人はドイツへ行く前に、長崎で勉強致しました。その時の先生が写真術を始めた一人の上野彦馬という人だったそうです。

この上野彦馬は、実は、ハラタマが大阪へ来る前に長崎で、精得館で教えていた時の弟子だそうです。従って、長井はハラタマの孫弟子ということになるかと思えます。

もう一人の高峰讓吉、この人は北陸の出身で、アメリカへ渡りまして、アメリカでいろいろな研究をして、心臓に作用致しますアドレナリンというホルモンがありますが、これを見出だした人です。それから消化酵素でジアスターゼというのがありますが、これを見出だしまして、タカジアスターゼという名で売り出しました。日本へ帰って来ましてから、今の理化学研究所を創った一人だそうでございます。この高峰讓吉は、丁度、舎密局の出来ました頃、隣に仮病院医学校がありまして、その医学校の生徒だった。それで、舎密局の講義を聴いたそうです。三高同窓会の名簿では、高峰讓吉は、開成所の旧職員ということで載っております。ですから長井も高峰も、三高と、あるいは、ハラタマと縁がある、ということになります。

次に明治二十年代になりますと、第三高等中学校時代ですが、岡山に附属の医学部が出来ました。これに薬学科が、併設されております。明治二十五年から三年間に三十三人の三高薬学士が誕生しているんです。但し詳しいことは存じません。

三十年代になりますと、新しい三高が発するわけですが、三高を卒業した人が、多く東大の

薬学科へ進みました。最初の人が、明治三十四年の三高卒業だったんですが、大学在学中に、三高と東大薬学を結ぶ人達で「癸卯会」という会を作りました。「癸卯」というのは干支の呼び方でございまして、「みずのとつ」、「癸」は十干の「みずのと」で、徳川の葵の紋の草かんむりを取った様な字でございます。「卯」は、十二支のうさぎでございしますが。この癸卯の年（明治三十六年）に癸卯会という会を作りました。それ以来、今日まで、この会は続いております。そして、しょっちゅう、会合を持ったり、芝居見物なんかをしておりますけれど、彼等が寄せ書き帖を作りまして『熊手録』という名前をつけております。その寄せ書き帖の第一冊目は明治四十二年の秋に始まっておりまして、根津権現の境内の椎茸飯屋、娯楽園という所で、新入生の歓迎会を開いたというのが、最初の記録でございます。これも現在まで続いているわけですけども、第一冊目の最後は、昭和十二年でございまして、昭和十二年の四月に、京都の祇園の近くでしようか、中村楼という所で、盛大な会をやりました。この時は、当時の校長の、森 総や石橋栄達さんなんかも、呼んで会をやっています。その第一冊目の寄せ書き帖は、大変貴重なものだと思いますので、現在は三高の同窓会本部に預けてございます。薬学関係の先輩が、大変懐かしがられるものですから、預ける際にコピーを作制致しました。その一冊を今日持って参りましたので、ご回覧頂きますが、随分、勝手な事が書いてございます。それと同時に、当時の領収書、受取なんかが貼ってありますので、物価が判りになるのではないかと思います。

彼らは大正の終りから昭和の始め頃にかけてまして、集まる度に、天狗俳句ってのやっています。天狗俳句、あるいは天狗俳諧を、ご存知でしょうか、世間でも流行ってたのかどうかわかりませんが、俳句の上・中・下の句を、それぞれ別の人が紙に書いて集めまして、最後に、それを三つ並べて開けてみる、という事らしいんですね。従って、全然、意味の無い言葉があります代わりに、中に、まことに穿った様な句が出来上がることがあるんですね。参会者の人達の名前も詠み込んでありますので、実に、猥褻な句も出てくるわけですが、それも、全部記録してありますからご覧下さい。そういう事で、結構、楽しくやっていました。

ところで東京大学の薬学科は、明治十一年に、第一回の卒業生を出しているわけですが、昭和十四年に京都に薬学科が出来るまで、全国で大学の薬学科は東京にしかなかったんです。従って、この六十年間ほどは、毎年、出ます僅か二十人か三十人の薬学士が、牛耳っていたことになりました。いわゆる、町の薬剤師、この方々は、薬学専門学校、京都にも山科に、京都薬専があります。たけれども、薬学専門学校で、養成されていたわけでありまして、ですから、恐らくこの業界の主なところは、官民共に、僅かの東大出の薬学士が押さえていた。薬関係だけじゃなくて、ビール会社にも行っておりますし、満鉄の中央試験場にも、随分入っています。それにどうしたわけか、東大薬学科には三高の人達が非常に沢山行っておりました。その一つの例と致しまして、私が入学致しましたのは、昭和十五年なんですけれども、この時、薬学には講座が六つございました。一

つの講座は新しく、助教授が主任だったわけですが、この教室主任が六人おりました内で、一高の出身が一人、二高の出身が助教授を入れて二人、で後の三人、これは三高の出身でございました。しかも、その時、助教授が二人いらしたから、結局、当時、昭和十五年の東大の薬学科で、教授・助教授が十人いたわけですけれども、その内の五人は、三高の出身者でした。しかも、その年、三高から東大に入ったのは、私一人でした。

大体、三高からお医者さんになる人は、大部分が、京都の医学部に行ったわけです。薬学科も、その例にもれませんが、私の後、三高から東大の薬学へ来た人は、終戦までに二人、戦後が一人だけです。戦後の一人は全然、別の仕事をしておりますので、結局、私の後つてのは、二人だけです。一人は関西におります。も一人は札幌にしまして、この方は、今年の春まで、北海道大学の学長をやっております。伴 義雄さんです。薬学のような、非常に小さな所帯から、旧制帝大の学長が出たというのは、ちょっと珍しいんじゃないかと思えます。そういう様に、東大には、ほとんど、だれも参りませんでしたけれども、京都大には、昭和十四年から、十年程の間に、約六十人程の人が、三高から薬学へ参りました。ですから、薬学と三高というのは、結構、縁が深いんだなということが、申し上げられるかと思えます。

次に日本の薬学で、なぜ、これと云った薬が、出来なかったかと云うこと、戦前のことでございます。先程、申しました様に、明治十一年に、第一回の薬学科の卒業生が、九名出てゐるわけ

です。ところが、東京大学が、正式に発足しましたのは、明治十年の四月ですから、一年前です。ね。ということは結局、彼らは東京大学が出来る前から、薬学を学んでいたということになります。ですから大学南校とか、開成学校とか、東京医学校とか、こういう様な時代から薬学を学んでたということ。なぜ、この様に薬学が早くから行なわれたかということ、実は明治維新の頃から急に西洋医学が入って参りました。同時に西洋の薬が、沢山入って来たんです。随分、まやかしたもの、にせ物があつたんです。それから不純物が多かつた。従つて、先ず第一に、薬の鑑定、調査、分析ということが急がれました。ですから明治六年頃に、司薬場、薬を司さざる場所が東京と大阪に出来ました。大阪の司薬場は、舎密局の後の理学校の場所にあつたんだそうですが、そういうことで、先ず、その分析をやるということが、一番最初でした。ハラタマも、舎密局にいる時に、あるいは理学校になつてからかも知れませんが、造幣局へ行つて、金や銀の分析をやつて、『神陵史』にも書いてありますが、『金銀精分』という講義録を残しております。それから、「有馬温泉の成分分析の研究」とか、「糖菓の着色染料中の有毒物の有無試験」なんてのも、これを舎密局でやっているそうです。我々の時もありましたんですが、東大の薬学科の講座に、「衛生裁判化学」というのがありまして、いわゆる、食品衛生とか、それから裁判に關係する毒物の検査等の講座がございます。それから日本薬局方という、いわゆる薬の成分でありますとか、その検定法・分析方法等を、詳細に記しましたものが、勿論、今まで続いておりますけれども、

これの最初の版が、明治十九年に出ているぐらい。だからとにかく、日本の薬学というのは、そういうにせもの、不純物・毒物を探すというのが、目標で出来たんだということが、影響してるんではなからうかというのが、考えてございます。

実はこれにも少し有力なバックアップがございますので、そちらに移らして頂きます。話はかわりますが、幕末に大阪に緒方洪庵という蘭方医がおりました。福沢諭吉や、大村益次郎を育てた適塾の緒方洪庵ですけど、あの人の一家といえますか、子孫は非常に三高と関係が深いんです。緒方洪庵の次男が緒方惟準これよしという人ですけど、この人が先程申しました舎密局の隣にあった医学校、あるいは仮病院、高峰讓吉が学んだ医学校を創った人でございます。明治二年五月一日、ハラタマの開講の講演にも出席しております、その記念写真にも出てる人なんです。この緒方惟準の子供、それも又、次男になりますが、銈次郎、この人は第三高等中学校時代の出身でございます。それから三男が知三郎、四男が章といいますが、この二人は明治時代の三高の出身、今の次男の銈次郎さんの息子さんが、緒方準一・英雄・富雄と三人おりますが、これらの方が全部、大正時代の三高の出身。それ以外に大正の始めに緒方洪平という方、それから昭和になって緒方正美という方も、全部、緒方一家の人達です。まだ他にも、いらっしやるんじゃないかと思いません。

追記 『神陵史』によれば、舎密局開講時の生徒に、緒方十郎が居るが、この方は惟準の弟、

洪庵の第十子の緒方十郎惟直ではないだろうか。惟直は嘉永六年（一八五三）の生まれだから、開講の明治二年には十五、六才である。なお甥の緒方章博士の著によれば、十郎惟直はイタリア婦人と結婚し、若くしてかの地で客死された。

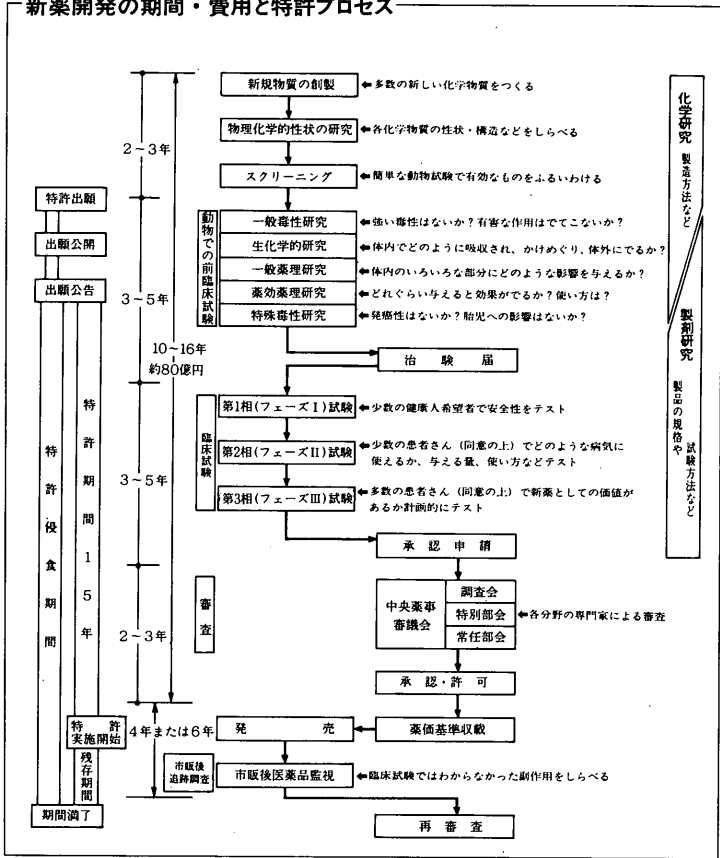
そういうことで緒方洪庵の子孫というのは、非常に三高と関係が深い。で、勿論、全部お医者さんになってるんですが、たゞ一人、緒方惟準の四男の緒方 章さんだけが、東大の薬学科に進んでるわけです。章さんは天王寺中学なんですが、天王寺中学で一年の時に、堂島川でボートをこいでおりました時に、相手のオールを当てられてから、発熱して、とう／＼胸膜炎になって休学したという、いきさつがあります。非常に身体が弱いということで、兄の銈次郎にすすめられて、本人は医学科に行きたかったんだけど、止むなく薬学に進んだということなんです。この緒方 章さんは、先程の『熊手録』に出ております明治四二年、根津権現の椎茸めし屋で、歓迎会を開いて頂いた時の新入生の一人であります。私が入学した時は、東大の薬学科の教授でございました。先生は、本来、医者になりたかったんだけど、止むを得ず、薬学に行ったというんですから、何とかして、新しい薬を創ろう、それも特に結核薬を創ろうということを考えていたんです。章さんは、自叙伝を残しておりまして、キリスト教徒だったものですから『一粒の麦』という題なんです。その自叙伝の中で、三高時代あるいは東大の薬学科時代のことを書いてあるわけです。何とかして薬を作りたいと思った、所が、ということで、私の考えの裏づけ

になるわけですけれども、先生はこういうことを書いております。「つまり、薬学の始まりを調べてみると、日本の薬学は、薬の真贋良否を化学的に検査する人と、薬のとり扱い者を養成し、それに加えて、外国からの粗悪薬品の輸入を防止する為に、外国の真似をして、日本でその薬を作る人を養成する目的で設置され、その制度が今まで続いて来たのであって、根本的に薬を研究する、薬を発見するという仕掛けになっていなかったのである。」という様に書いてるわけです。この様な大先生がおっしゃることですから、私もその様に戦前の日本では、そんなに薬が出来る様なことはなかった、ということをお願いしてよいかという様に思います。

これは戦前の話であって、戦後は勿論違います。薬学部の内容も変わり、製薬会社の研究部門も充実しておりますので、成果が上がっていると考えます。

そこで第三番目の、そんなこと云ったって、薬を作るといふことは、大変なんだという話に入らせて頂きます。お配りした図は現在、薬というものが、どの様なプロセスで開発され、市場に出て来るかということですが、その図の真中を見て頂きますと、「新規物質の創製」という所から始まります。勿論、昔から薬ってのはございまして、大体、天然物、草根木皮を使つたわけですね。植物が主ですが、それ以外に、動物とか鉱物の天然物を使ってるんです。十九世紀の終り頃になりますと、化学が発達しまして、そう云った薬と云われる草根木皮の中の有効成分を取り出そうと云うことになります。有効成分を取り出して、その、化学構造を決めて、新

新薬開発の期間・費用と特許プロセス



しいものを作つてゆくということで、現在でも新しい薬の出発点というのは、ものすごい数の新しい化学物質、化学化合物を作るといふ所から出発するわけでございます。それからいろんな化学的物理的性状を調べたり、スクリーニングをして参りますが、ある程度、目星がつかますと、動物実験に入るわけです。これには毒性を調べたり、そのものを飲ませた場合、体の中で、どの様に変つてゆくかということ調べる検査や、それからいわゆる薬としての効果等を、段階的に調べてゆくわけですが、その動物実験の最後でございます、「特殊毒性研究」というのは、その薬を飲まして、ガンが出ないか、発ガン性がないか、あるいは奇形児が生れないか、催奇性がないかという様なことを調べることなんです。これは一口では、その様に申しますが、何しろ何年にも亘つて物質を動物に与え続けて、しかも、それで影響が出たらダメなんです。プラスになつたらいけないんで、最後までマイナスでないと認められないという、誠に辛気くさいといひますか、そして張り合いがない様な仕事でございますけれども、とにかく、この特殊な毒性試験というのを経まして、そして初めて人間に対する実験に使うということです。第一と第二と第三相という様に三つの段階がございますが、最初は健康な人に使つてみて、安全かどうかというのを調べる。その次に、わずかの数の病人に、患者に使つてみて、その量であるとか、使い方なんかを調べる。最後にフェーズIIIというのがございますが、ここである程度の広い範囲の、あるいは幾つかの施設に於て、臨床実験を行うということなんです。この場合にはその目的とする薬が入

っておりませ剤と、全然、何にも入っていない、あるいは澱粉の様なもの、全然、効き目のないもので形・色・味などが同じ、いわゆるプラセボとの両方の実験の薬を作ります。それを患者さんに与えるわけですけれども、これを患者さんに与えるお医者さん自身も、それが本物か、あるいはにせ物か、どっちを与えたかわからない様にして与えるという体制をとっているわけです。ダブル・ブラインドテストと云っておりますが、これはどうしてかと云いますと、薬とか、何でもそうでしょうが、案外、人間の気持で効くわけです。非常に信用しているお医者さん。あるいは高名なお医者さんから、「これを飲んだら効きますよ」、と云われたら、本当に効いてしまう可能性があります。そこでその与えるお医者さんも、どっちを与えたか、わからない様にして、中央に一人コントローラーを置きまして、後は何人かのお医者さんが全部、その命ぜられるままに与えて、データを最後に寄せ集めて、開いてみて、推計学的に処理をするという形をとっております。

そういう様な形で臨床実験を終わりますと、厚生省薬務局に薬としての申請をして、そして専門家の集りであります薬事審議会で審査を受けて、「承認許可」を得るということになります。「承認」というのは、その化合物の、薬としての薬効、ききめを認めるという「承認」でございます。「許可」というのは、その薬を製造してよろしいという「許可」になります。そこで厚生省の薬務局の手続きは、終るんですが、それがもしお医者さんで、病院で使われる薬であれば、健康保

険制度に組み入れられなくちゃいけませんので、いわゆる薬の公定価格である、薬価基準に収載されるのを待たなくちゃいけない。これが収載されました、やっと製薬会社では、発売が出来るわけなんです。しかし発売した段階に於きまして、それまでこの薬は、いわゆる限定された医者皆さんの元で、非常に厳密な管理をされて、投与されているわけですけども、一旦発売されますと、これはどこでどんな形で使われるかわからない。しかも非常に大勢の方々に使われるということになりますので、発売をしました後、物によりますが、四年か六年間ずっとその後の実績を追求するという事になっております。そして、六年後に、も一度、再審査を受けまして、改めて薬というものが世の中に出て来る。という様な形でございます。

従いまして、ずい分、時間がかかる。何年もかかる、おまけにお金もかかる。これはしばらく前のデータだと思えますが、十年から十六年、八十億円かかるんだということを云っておりますけれども、つまり、一つの薬が世の中に出るといのは、大変なことなんだということが、ある程度、ご理解頂けるかと思えます。

これはアメリカのデータでございますけれども、薬が最初の化合物の段階から、最後に至るまでに、どの様にスクリーニングされ、落とされてゆくかと云う比率を出してはるんですが、医薬品開発の成功率は大体、一万個の物質の中から一つ出るか出ないかと云うことだと思えます。具体的な例を申し上げますと、これは大部古くて、一九七〇年のデータでございますが、アメリカ

カの製薬会社で、全部を合せてだと思えますけれども、十二万六千六十の物質が合成されたり、分離されたりして、それを実験にかけた。薬理学的な段階といえますか、動物実験の段階だと思えますけれども、これが、七十万三千九百回行なわれた。そして更に、臨床実験に達した数が、千十三である。最後に実際に出た製品は、十六個であったと云う様なOECD（経済協力開発機構）の報告がございませう。その位、薬って云うものは、出来にくいものだと云うこと、それから非常に時間がかかる。金がかかるという事が云えると思えます。

たま／＼中村君から話をしろと云れたのが、先月でございましたんですが、十一月と十二月の、しかも朝日新聞一紙だけですけれども、気が付きましたもので、この新薬の開発に関連した記事が幾つかございました。その一つは、図の一番左の特許の問題なんです、十一月始めに、アメリカの製薬会社に裁判で訴えられていた日本の製薬会社が悪くなつたという記事が、出ておられます。特許の問題というものは、いわゆる知的所有権の問題で、アメリカとの間で非常に、いろんな問題があるだけじゃございませんで、ここでもお解り頂けます様に、特許の期間というのは、薬も十五年だと思えますけれども、実際には薬が市場に出るまでに、ずい分、長い時間がかかってしまふ。従つて、本当に特許で効果を持つのは、わずかな期間しかない。これは昭和六十一年のデータでございませうけれども、厚生省のデータによりますと、特許の有効残存期間という

のは七年十一ヶ月しかないという様に云っております。ですから特許の期間をのばして欲しいというのが製薬業界の願いであり運動でございます。

次の朝日の記事というのは、凶の真中の動物実験の問題でして、先程から申してます様に、随分長い期間、随分、沢山の数の動物を実験に使うわけです。これは非常に残酷だと云うのが、動物愛護運動のグループからの反対でございまして、一番はげしいのがイギリスでございます。フランスもそうですが、日本でも段々と、そういう様な運動が出て参りまして、最近の朝日の記事では、その動物の代りに、何かこういったものを調べる方法が出来ないだろうか、あるいはバイオ細胞なんかで見られないかという見方が出ております。

それから三番目に、これはやはり十一月の記事ですが、臨床実験の問題、人体実験の問題で、ある製薬会社がデータを隠したという問題がございまして、これは朝日の社説で論じておりましたけれども、要するに、日本の臨床試験のやり方というのを、もっと国際的な水準でやれつと云う様なことを云っております。

それから、全般的に薬が出来るまでの期間が長すぎるということ、これは同じ朝日の記事ですが、アメリカの報道でして、アメリカはFDA（食品医薬品局）という組織が、薬の許可の部局になっておりますけれども、ここで薬が出るまでの時間が、余りにも長すぎるので、短かくしようじゃないかということです。臨床試験の期間が、今まで四年半かかったのを、二年半位でい

い様にするとか、あるいはFDAでの審査が二年半かかっているのを半年位にしようとか云うのを決めたとか、あるいは九四年から、再来年からですか、やるという様なことが出ております。

それから薬の承認にもっていく薬事審議会というのがありますが、ここでの審査の状況、あるいは審査の時のデータというのを、一般に公表しようという動きがございます。これは新聞じやなくて、今月の始めのNHKの朝のニュースで報じました。

それから最後に、これも今月の始めの朝日の記事です。先程、申しました様に薬は発売後六年経って、再審査をするんだということになっております。実は現在、非常に使われております睡眠薬、これが日本でも一九八二年に許可になったものですから、既に十年目になりますが、これの副作用という問題が出て参りました。イギリスでも同じ様な状況で、今回三ヶ月の発売停止にしたという記事が出ております。つまり、薬というものは町に出たからと云って、完全なもの、六年間という様な随分、手間をかけて見直しておりますが、完全なものではないんだという様なことが云えるんじゃないかならうかと思えます。

そういう様に見ますと、新薬の開発一つを取りましても、いろいろの問題が残っているという意味では、中村君からの最初の題の「薬業の諸問題」の一つについて、お答えしたことになるのかも知れないと思えます。今一枚の紙は、何も申し上げることございません。只、薬にかかわるそういう言葉があるということだけを、ご紹介させて頂きまして、以上で私のお話を終らして頂

きます。

(元田辺製薬常務取締役)

ご承知の通り、薬はうまく使えば、病人を治します。しかし薬について通曉している者も、同時に人間とは何か、生命とは、体質とは、健康とは何かを知る時のみ、薬はうまく使えるでしょう。(レオナルド・ダ・ヴィンチ)

病気に逆らうとますます病気をかき乱し目覚めさせる。むしろ暮らし方によって、病気を徐々に衰えさせ、終わりに導くようにしなければならぬ。薬と病気との激しい摺み合いは、いつもわれわれの損になる。なぜならこの二つのものの斗争は、われわれの体内で行なわれるし、薬は頼りにならぬ援軍であり、本来はわれわれの健康の敵であって、われわれの領分に入れば、必ず何らかの混乱を引き起こさずには済まないからである。少しそのま、放っておこうではないか。(モンテーニュ)

我々の肉体は生命の為の機械だ。肉体というのはそういうふうに出て来ているのだ。だから肉体の中に生命をそっとしておいてやって、自ら守らせてやればよいのだ。薬

でじやましたりするより、その方がずっと効果がある。(トルストイ「戦争と平和」)

薬は皆毒にて候へ共、毒と名を付け申さず候事は、長所を用い候故に候、人を用い候には其の長所を取って、短所に目を付け申さず候こと、聖人の道にてござ候。

(組來先生答申書)

くすりあればとて 毒をこのむべからず (親鸞 御消息)

薬人を殺さず 薬師人を殺す (西鶴織留)

甲の薬はこの毒 One man's meat is another man's poison.

Natura Sanat Medicus curat. 自然が病気を治す 医療がそれを援助する

いっぺん笑うのは 三度薬をのむより役に立つ (ドイツ)

時は最良のくすり (オランダ)

病気をかくす人には薬はない (エチオピア)

甘い言葉は病気にする 苦い言葉は薬になる (中国)

傷の薬は 傷を思い出さないことだ (イタリア)

薬はしばしば 病気より危険だ (スウェーデン)

死をいやす薬草はない (ドイツ)

死のほかはどんなものにもくすりはある (イギリス)